

## エミン・テスケレジッチさん

栗倉 輝彦

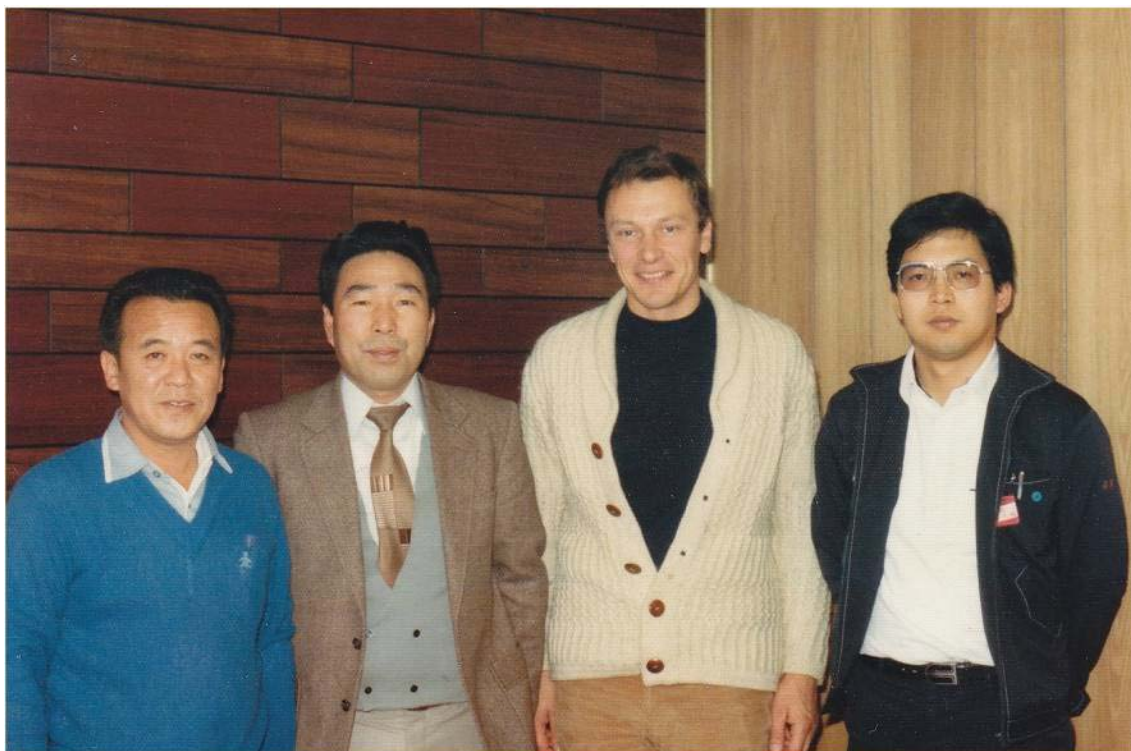
●昭和 56 年（1981 年）の 11 月 11 日から 12 月 10 日までの約一ヶ月間、当時のユーゴスラビア社会主義連邦共和国と我が国の技術協力計画にもとづいて、JICA がお世話するルダーボスコビッチ研究所・養殖研究開発室長のエミン・テスケレジッチ博士が旧水産孵化場にやってきた。当時、小生は 46 才、彼は小生より 12 才若い 34 才であった。

滞在中、増毛支場、上川町のニジマス養殖場、えりも支場などの見学のため、小生が車を運転して 2 泊 3 日の出張に出かけたことがあった。

途中の車の中で、お互いに知っているヨーロッパの歌を歌うことになったが、小生は学生時代に合唱団で

歌った「ウ・ボイ」を歌ったが、歌い終わると彼は驚いた顔をして「この歌はクロアチアの歌だ!!」と云った。「ウ・ボイ」はチェコの歌として、永年、関西学院グリークラブで歌われてきたが、男声合唱を経験している人にはよく知られている歌である。

小生は 1979 年から 1980 年にかけて、3 ヶ月ほど、海外研修に出かけていたこともあり、勤務先では、比較的英語が話せると評価され、テスケレジッチさんのお世話のお手伝いをするようになった。約 1 ヶ月の滞在であったが、研修は主に育苗餌料科と魚病科で行われた。当時、小生は魚病科長であった。



上川町と内水面漁協の皆さんと（左端：明石組合長さん）



えりも町の宿での夕食



サッポロ・ビール園での送別会



●昭和 58 年 (1983 年) 8 月、旧チェコ・スロバキアのチェスケブデヨビッチで開催された第 1 回国際魚類寄生虫シンポジウムの後、エミン・テスケレジッチさんの国、旧ユーゴスラビアを訪れた。両国ともに現在はチェコ共和国とクロアチア共和国に変わっている。

旧チェコ・スロバキアから旧ユーゴスラビアのザグレブまでは、途中、オーストリアのウィーンを経由して、夜行列車に乗り、朝早くザグレブに着いた。

当時、ルダーボスコビッチ研究所の養殖研究開発室はザグレブ大学獣医学部で、ウイルス性魚病の研究で

有名だったフィアン博士の研究室の近くにあった。フィアン博士は海外出張中でお会いできなかった。

ユーゴスラビアでの滞在費はルダーボスコビッチ研究所が負担してくれた。

ザグレブのホテルに何泊かした後、エミンさんの運転する車でアドリア海沿岸をドライブし、スプリットにある研究室のアドリア海支所やオソルのエミンさんのサマーハウスなどで約 2 週間滞在した。サマーハウスでは一日中、水泳パンツだけで過ごし、アドリア海に潜ったりした。



講演の後の研究室スタッフと記念撮影：左から二人目：テスケレジッチさんの奥様で同じ研究室で働くズラティツァさん。エミンさんと同じ年の生まれだがエミンさんは早生まれ（ザグレブ大学獣医学部の 1 年後輩）。



エミンさんのサマーハウスで



お別れの日、テスケレジッチ宅で、奥さんのズラティツァさんが写す  
お土産に大きな海綿と「ウ・ボイ」の入ったオペラのレコードをいただく。右から長女:イバさん、エミンさん、  
次女:イダさん、長男:アドさん、一番左が小生(アドリア海ですっかり日焼けしている)。



●昭和 63 年（1988 年）10 月、札幌で「イワナとサクラマス

の国際シンポジウム」が開催された。この頃、エミン・テスケレジッチさんはご家族とともにカナダ・バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学の研究室に留学しており、カナダからシンポジウムに出席された。



会場の北大国際交流会館にて



サッポロ・ビール園で懇親会

左から：浦和さん、日系カナダ人のアライさん、長澤さん、小生、テスケレジッチさん。



我が家にも一泊される（朝食の時の写真）



千歳空港まで見送る。この時、エミンさんは「これで私は2度、日本を訪れる機会があったが、この次はあなたがユーゴスラビアを訪れる番だ」と言われて別れた。

●1980年代の終わりから、1990年代に旧ユーゴスラビアでは色々なことがあり、大変であった。後で判ったが、エミンさんも軍役についたそうである。1983年に訪れた時には何の問題もない平和な国と思っていたが、結局、ユーゴスラビアという国は2003年に崩

壊してしまった。エミンさんのクロアチア共和国は1991年に独立していたので、問題なく生活していると思っていたが、69才になった2005年の年賀状に家族の写真と同封してメールアドレスを付記して送った。



間もなく、メールが届いた。「クロアチアに招待したい」というものであった。早速、「今年70才になり、ご好意を受けてもお返しができないので、辞退したい」とメールを書いたら、「見せたいものがあるので、是非来てもらいたい。また、研究所での講演を用意してもらいたい」というメールが届いた。

そこで考えた。なるべく迷惑をかけない方法はないかと？

「途中、パリに寄りたいので、日本からパリまでの往復航空便の料金はこちらが負担し、パリからザグレブ往復分だけを負担してもらいたい」と言うことにしてもらった。

研究所からの出張依頼書も届き、パリの滞在を加えて、2005年8月17日出発、8月31日帰国ということになり、講演の準備を始めた。1983年の時はスライド使用で、クロアチア語の通訳付きであったが、今回はパワーポイントが使用でき、通訳無しの講演で、最後に「ウ・ボイ」の演奏を加えた。

パリに4日滞在した後、ザグレブに向った。ザグレブ滞在中はエミンさんの自宅に泊ってもらい、毎日、エミンさんの運転する車で研究所に通った。朝の集会ではフリートーキングで、若いスタッフから色々なことを聞かれたが、久しぶりに英語漬けになる。



58才になったエミンさんとズラティツアさんと再会する

ズラティツアさんは魚類の餌料の研究をしており、研究室には魚病を研究するスタッフが2名いた。最初に旧水産孵化場に来た時、育種餌料科と魚病科で研修したが、2005年現在のエミンさんの研究室は、昔の育種餌料科と魚病科を一緒にしたような研究内容であった。



ザグレブの中心街に近い階段を上ったところに家があった（歩道に面した手前から2つ目の窓の部屋に泊る）。すぐ、右側に街に降りる階段がある。



研究所の講堂で約1時間半の講演の後、記念撮影。エミンさんが写す。

講演の最後のところに「ウ・ボイ」を入れたが、大変良かった。クロアチアでは、良く知られた歌なので、一緒に歌い出す人もいた。





研究室のスタッフと（講演終了後、研究室の前で写す）。22年前はズラティツァさんと前列右端の研究者（植物プランクトンが専門）だけが、在籍していた。



講演の終わった日、テスケレジッチ夫妻とアドリア海のオソルに向かう。

滞在していたイバさんに再会した時、「テルヒコ」と呼んでくれた。22年前に同じサマーハウスで、小学生のイバさんとクロアチア語と日本語の話を片言の英語で話し会った思い出がある。右端：イバさん、隣は息子さんのルカさん。



オソルのサマーハウス（後に見えるのは15世紀に建てられた教会）2階の窓のある部屋に泊る。22年前は2階建てだった。



オソルの帰リエミンさんが所有するクニンのニジマス養殖場に寄る  
彼が最初に北海道に来た時に、案内した上川町の養鱒場と同じくらいの年間生産量を上げており、ザグレブにある畜養池に運んで、順調に販売していた。長女のイバさんが経営のマネージャをしている。





帰国する前夜、長男のアドさんとご家族が、時差が1時間もあるバーレーンからやってきてくれ、街の日本食レストランで夕食をご馳走になった。

帰路、テスケレジッチ宅までの階段の途中で記念撮影。



テスケレジッチ一家全員の写真を写す

左から長女：イバさん、孫のルカさん、愛犬：ヴェルディ、奥さん：ズラティツァさん、長男の孫：エマさん、エミンさん、次女：イダさん、長男の奥さん：シルビアさんおよび長男：アドさん（航空会社のパイロットをしている）。



今年になってメールに添付してくれた昨年のクリスマスの写真

長男のアドさんにお孫さんが一人増え、次女のイダさんも結婚されたようだ。長女のイバさんも再婚され、ルカさんも成長している。

●あしがき

毎年、「札幌雪祭り」の写真を3名の外国人にメールで送っているが、今年のスラティツァさんのメールに、最後に載せた写真が添付されていた。今年、エミンさんは65才を迎えたと思うが、クロアチア共和国の公務員の定年退職は65才と聞いていたので、すでにボスコビッチ研究所を退職されたようである。(エミンさんとスラティツァさんの連名で出したのだが、返事が何時もと違うスラティツァさんのアドレスからであったので、あくまでも推測ではあるが)。この写真は昨年のクリスマスに写されたものであるもので、エミン・テスケレジッチさんが、初めて旧水産孵化場に研修にやって来てから丁度、30年目の写真ということになる。

この30年間で、旧ユーゴスラビアは大きく変わり、お互いに2度づつ訪問する機会に恵まれた。送られてきた写真を見て、これまでのことが懐かしく思い出され、本文を書くきっかけになった。

2005年のメールに「見せたいものがあるので、是非来て欲しい」と書いてあったのは、訪問中、直接話には出なかったが、「研究室の成果」、「ニジマス養殖場の成功」、「幸せなご家族」に加えて、「平和になったクロアチア」を見てもらいたかったのだと思っている。

2012年4月20日

(元北海道立水産孵化場長：あわくら てるひこ)